

ネパール、モランギヤ・タルーの家を舞台とした 「土」による連環

— 女性たちの成形する家壁装飾モカをめぐる —

竹内 愛*

キーワード

ネパール、モランギヤ・タルー、家、土、家壁装飾モカ

目次

- | | |
|--------------------------------|----------------------------------|
| I はじめに | 2 C家に見られる家屋装飾モカ |
| II モランギヤ・タルーとは | 3 モランギヤ・タルー女性が土によって神と関わる |
| 1 タルー民族とモランギヤ・タルー | V 分析：土を介した多様な存在の連環 |
| 2 タルー民族の「土」の文化と家屋装飾「モカ」 | 1 家における「土」を介したつながり：家族、神々、家畜動物、作物 |
| III モランギヤ・タルーの家の暮らし | 2 タルー民族の大地信仰：「土」を介したつながり |
| 1 調査地P村の概要およびC家の概要 | VI 結びにかえて：モカの意味と家の変容 |
| 2 C家の家族の1日の過ごし方（11月のある日を事例として） | |
| 3 C家における儀礼祭祀 | |
| IV 家における土を使った女性たちの信仰生活 | |
| 1 C家の家屋に使用される4種類の土（マティ） | |

I はじめに

ネパール南部のタライ地方（亜熱帯森林地域）には先住民族のタルー民族が広く居住している。そのサブ・グループであるモランギヤ・タルーは、タライ地方の東部の2州（モラン郡とスンサリ郡）に居住している。モランギヤ・タルーは、伝統的に家屋の扉の周囲に、土を使って立体的に幾何学模様や花や鳥などの模様「モカ」(mokha/mokhaa)¹を成形することで知られている。モカとは、土、ジュート麻を細かく刻んだ

ものを混ぜて手作業で製作される立体的な家屋装飾である。モカの成形は女性の仕事とされており、かつては嫁探しの条件の一つにモカ作りの能力が挙げられるほど、モカはモランギヤ・タルーの家²にとってなくてはならないものであるとされる。

筆者は、2023年以降タライ地方東部のP村で断続的にフィールドワークを行ってきた³。P村のインフォーマントの人々は農業を生業にしており、収穫した農作物を市場で販売している。また、乳牛から搾ったミルクを毎朝近所の茶店に売って、生計を立ててい

* 南山大学

1 モカは、上部のモカ (mokha) と下部のモカ (mokhaa) から構成されており、区別する必要がない場合は、総称として、モカと呼ぶ。上部のモカ (mokha) と下部のモカ (mokhaa) の詳細についてはIV章で述べる。

2 本稿では、「家」を家屋、庭を含んだ屋敷地全体、家族の生活の場所として定義する。

3 筆者は、2003年から現在まで、カトマンズ盆地の旧王都バタンにおけるネワール民族の女性の生き方について、女性自助組織を中心にフィールドワークを行ってきた（竹内 2023など）。本稿は、それとは自然環境や文化が全く異なる地域（南部低地）に居住するタルーの女性たちの生き方を中心テーマとして実施したフィールドワークに基づいている。

る。モランギヤ・タルーの伝承では、「モカのある家の貯蔵米は（モカが守ってくれるから）減らない」といわれている。モカが米蔵を守る存在として信仰されているのである。モカは、ネズミや腐敗、あるいは災いから米を守り、米が尽きないようにする力を家に与えるということを表している。また、美しいモカのある家には、「女神ラクシュミーが訪れる」と信じられている。ラクシュミーとは、美、豊穰、幸運、富を司るヒンドゥー教の女神であり、家にラクシュミーが訪れることで、家族をはじめ、家畜動物など家全体に幸運がもたらされると信じられている。

モランギヤ・タルーの農村では、「家」は、家族の住居というだけでなく、多くの機能を持っている。「家」は、家族が、農業・家畜動物の飼養などの生産活動、および消費活動を中心とする日常的な暮らしを行う場であり、また、神々とながら儀礼祭祀の場でもある。

モランギヤ・タルーのモカについては、これまでの先行研究で、建築芸術、文化として触れられ、その模様の分析についてなされたものはある (Skar 1999; Maiti 2004; Chaudhary 2022)。しかし、女性たちがどのようにモカを成形し、それがどのような意味を持つのかについて分析された研究はない。そこで、本稿では、それらを明らかにすることを第一の目的とする。さらに、女性たちが家にモカを成形することにより、家に存在する神々・家畜動物・作物などと家族がどのように関係づけられるのか、それによって家全体に幸運が訪れるとされる信仰のあり方について、それらを媒介する「土」に注目して考察したい。

本稿の構成は以下の通りである。

第Ⅱ章では、モランギヤ・タルーについての概要、そして、タルー民族の土の文化について述べる。第Ⅲ章では、筆者のフィールドワークのデータに基づいて、調査地のインフォーマントのC家の日常と儀礼祭祀の過ごし方について述べる。第Ⅳ章では、C家の家屋装飾モカについて、そのモチーフ、素材、成形のプロセスなどについて述べる。第Ⅴ章では、「土」を媒介とする家族、神々、家畜動物、作物のつながりについて分析し、最後に、「家」において女性たちがモカを成形・

維持することの意味について、また、その変化について考察する。

Ⅱ モランギヤ・タルーとは

1 タルー民族とモランギヤ・タルー

タルー民族は、インナー・マデシュ（タライ平原と中央ヒマラヤであるマハーバーラタ山脈に挟まれたシワリク丘陵地帯北側にある低地、盆地地域）として知られる地域と、広大で温暖な平原であるテライに広がる密生した熱帯ジャングルに居住している（以後、Gautam & Thapa-Magar 1994: 325より）。タルー民族は、ネパールの東端から遠西部に至るまで分布しており、独自の言語、文化、社会構造を持つ。多くの学者によって、これらの地域の先住民族とされている。

タルー民族の歴史的背景と起源については、様々な説がある。例えば、インド・ラージャスターン州のタル砂漠からの移住者とする説、ムスリム侵略者から逃れたラージプートの女性と使用人との間に生まれた子孫であるとする説⁴もある。他には、仏陀が涅槃に入ってから約100年後に、仏教が2派に分かれたが、カピラヴァストウの釈迦族はステューヴィア（上座部）に傾倒したため、自らを「ステューヴァー」と呼ぶようになり、この名が徐々に変容し、今日の「タルー」となったという説もある（Gautam & Thapa-Magar 1994: 325–327; Pokharel 2025: 3–4）。

タルー民族には、多くのサブグループがあり、例えば、「ラナ、カタリヤ、ダンガウラ、カタリヤ（プルビヤ）、チトワニヤ／ナワルプリア、コチラ、モランギヤ（ラムプツツ）など」（Guneratne 2002: 44）がある。モランギヤ・タルーもタルー民族のサブグループのひとつである（Meyer & Deuel 1997: 124）。モランギヤ・タルーは、ネパール南東部タライ平原のモラン郡およびスンサリ郡に主に居住している⁵。

モランギヤ・タルーは、別名ラムプツツ・タルーとも呼ばれる。ラムプツツとは、モランギヤ・タルー女性の民族衣装（アチャラ・カドゥキ⁶）の着用方法が、布を腰に巻いて最後の残りの布を腰まきに入れ込み、

4 後者の説によれば、これらの地域で長期間にわたり配偶者なしで生活した結果、使用人との間に子孫が生まれ、これがタルー民族と呼ばれる民族の起源となった。タルー民族の中には、タルー民族の女性が夫に食べ物を運ぶ際、足で皿を押して渡す習慣があると主張する者もいる。

5 2つの郡は、1962年以前は1つの郡であった。

6 「アチャラ・カドゥキ」とは、モランギヤ・タルーの女性の民族衣装であり、裾には、美しい花の模様が刺繍してある白い（近年は、黄色や水色などの色もある）サリーである。

垂れた布が長い（ラモ）尻尾（プッチャラ）のように見えることがその由来とされている。

2 タルー民族の「土」の文化と家屋装飾「モカ」

タルー民族の女性たちは様々な実用的土製の容器を製造することでも知られているが、マイティは「各家庭には必ず8～10点の土製の容器が様々な形状・サイズで備えられている」(Maiti 2004: 98)と述べている。さらに、マイティは、タルー民族の土の文化について次のようにまとめている。「かつてタルー民族はわずかな家財しか持たず、移動生活を送っていたため、場所を移すのにさほど苦労はなかった。定住生活に移行すると、様々な容器が必要不可欠となった。これにより近隣地域から商人たちが定期的に彼らの地域に流入し、商品を売り歩くようになった。この購入にはかなりの出費を伴うことが判明したため、タルー民族は自ら土器を作るようになった。タルー民族が居住する地域は主に粘土質の土壌で構成されており、これは土器製作に極めて重要である。この地域の特徴が彼らの土器製作活動を促進した。タルー民族の粘土細工における重要な特徴は、家屋の土壁、様々な容器・囲炉裏・玩具などの製作を含むすべての粘土細工が女性によって行われる点である。タルー民族の男性は決して粘土製品を作らないが、男性が女性を助けて大型穀物貯蔵庫の一部を家屋へ運び込み、最終的に組み立てる」(Maiti 2004: 93)。

モカは、モランギヤ・タルーに伝わる伝統的建築芸術である。特にネパール南東部のモラン郡、スンサリ郡、サブタリ郡、シラハ郡、ウダイプル郡で見られ、女性たちは、鳥や動物、花の模様や幾何学模様のモカで土壁を装飾する⁷。

モランギヤ・タルーの女性たちは、伝統的に、母から娘に、土を使って家壁に模様「モカ」(mokha/mokhaa)を成形する技術が継承されてきた。その模様に絶対的なきまりはなく、最終的には、成形する女性の感性に任されている。モカにはツルバナ模様や孔雀の図柄がよく見られる。多くのタルー民族は家を出た時に孔雀を見かけると、その日の幸運を意味すると信じており、縁起の良い動物である。また、「家にモ

カ(mokhaa)を成形することによって米蔵の米が減ることを防ぐことができる」というモランギヤ・タルーの言い伝えがあり、下部のモカ(mokhaa)は、家にとって、最も重要だとされる。下部のモカ(mokhaa)は、上部のモカ(mokha)の模様の土台となるデザインとなっており、シンプルな植木鉢、寺院などのデザインが多く見られる。モカは、ただ家を美しく装飾するだけではなく、家族の安定・繁栄した暮らしを願うという願掛けの意味を持つのである。

「タルー民族の芸術的志向と美への愛着は様々な形で表れており、その一つが家屋の壁面に施されるデザインや装飾である。タルー民族の住居は女性たちによって装飾され、壁面に美しい絵画、浮き彫り、彫刻などが施される。特に祭りの前には、既存の絵を修正したり、必要に応じて新たな絵を描いたりして家を美しく見せようと努める」(Maiti 2004: 86)。

新築の家を建設する際、モカを成形する前には、成形する場所の壁の脇に精米1マナ⁸を供えるプジャを行わなくてはならない。モカを製作することは、自然崇拝的な意味合いを持っている。モカとはモランギヤ・タルーにとって生活基盤を守るものであり、前述した通り、家にモカがないと、毎日、米蔵の米が減り続けるという言い伝えがある。

III モランギヤ・タルーの家の暮らし

1 調査地P村の概要およびC家の概要

調査地P村は、コシ州スンサリ郡に位置する、モランギヤ・タルーの集落である⁹。筆者は、2023年11月、2024年2月、2025年5月、12月に本調査地でフィールドワークを実施しており、家庭におけるモランギヤ・タルー女性の役割を中心に調査をしてきた(竹内2026)。

P村では、主に、米、ジュート、小麦や豆類、野菜が栽培されている。また、多くの家で、牛、ヤギ、アヒル、鶏、鳩を家畜動物として飼っている(以下は、竹内2026より)。

P村の北地区には、田の真ん中にコミュニティの祖先神(クル・デプタ)を祀る祠「グラムタン」があり、

⁷ その他、家屋内部にモカと同様の手法で作る「チャッカー」と呼ばれる飾り棚を作ることも有名である。棚のデザインは自由だが、寺院がモチーフになっていることが多い。

⁸ 1マナは、0.568リットルである。

⁹ P村には「チョウダリ」という名字のモランギヤ・タルーが多く暮らしている。



図1 C家の位置

毎年、ビクラム暦1月（バイサーグ）5日（西暦の4月頃）に、祈祷師によってそこでプジャが執行¹⁰される。P村の7ツール（小地区）に居住する全300家族の人々がグラムタンの成員となっていて、そのメンバーを、「グラムタンコ・サムダイ」と呼んでいる。彼らは、プジャの日に、祠へ鳩とヤギを連れて行き、そこで、祈祷師にその首を切ってもらい、祖先神へ生贄として頭部を奉納する。祖先神のために家畜動物を生贄にすることで、自分の願いが叶うと考えられている。頭部以外は家に持ち帰り、調理をして家族で食す。

インフォーマントのC家（図1）には、敷地に家屋2棟（3人の息子家族の寝室のある家屋と家長と家長の妻の家屋）、トイレ2棟、納屋1棟、倉庫1棟、家畜舎（日中生活用1棟、就寝用1棟）が建っている。家の東隣には田畑と小さな池があり田畑の周囲には多様な植物が植えられ、その背後には、竹林が広がっている。C家の家屋は、約50年前にこの地に引っ越してきた時に建設されたものである。

家屋は、大工の男性たちに依頼して、建てられたものである。壁は竹の骨組みに泥を塗ったものであり、屋根は建設当初はわら葺きで作られていた。その後、台所の屋根は、土器屋に依頼して、土器を連ねて瓦状

に屋根に敷いてもらった。一方、その他の部屋の屋根は、手入れの手間のかからないトタン屋根に変えた。ただし、トタン屋根は熱を吸収するため、夏場になると、日中は部屋に熱がこもり、部屋にいるより外の方が涼しいと感じることもあるという。

C家は、11人の父系拡大家族を構成している。ただし、普段、家に住んでいるのは6人（家長、家長の妻、家長の長男の息子、家長の次男家族）である。長男夫婦はカトマンズで出稼ぎ労働に従事しており、その息子が家に残って商売を営んでいる。三男家族は、ビラトナガル市で一人暮らしをしていた三男の妻の母親の足が不自由になったため、その世話のために母親の家で現在同居している。しかし、農耕で人手が必要な時期、儀礼祭祀の際には、都市部から女性たちは戻ってくるため、長男家族も、三男家族もP村と都市部の二拠点生活を送っている。ティハール祭が行われた調査時には、長男夫妻と三男夫妻もC家に滞在していた。

C家と隣り合うA家は、C家の家長の長兄の家族であり、B家はC家の家長の次兄の家族である。A家、B家、C家の関係性（図2）は、非常に親密であり、互いの家を日常的に出入りして、雑談したり、育児・家事を手伝ったり、モノの貸し借りも行っている。ま

¹⁰ プジャとは、神々に祈りを捧げる礼拝・儀礼を指す。信仰の実践方法である。

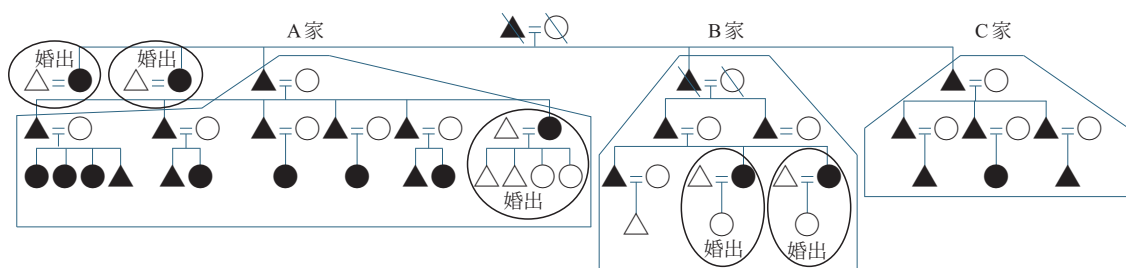


図2 インフォーマント家族の系譜図

た、農作業も助け合っている。

家とは、単なる建物と敷地ではなく、そこには一族が生産と消費をして暮らしてきた歴史があり、家族のアイデンティティそのものである。家は、礼拝室に祀られている祖先神（クル・デプタ）やヒンドゥー五女神（パンツァ・デプティ）とのつながり、そして、家畜動物、農耕とのつながりの拠点でもある。その大切な家の維持と繁栄を担うのは基本的に女性である。例えば、女性たちは、家で家族のケア（家事、育児など）を担い、祖先神、ヒンドゥー五女神のために毎日の夕方の方神々への礼拝（サンザ・パティ・プジャ）を行い、家族の繁栄を願う。また、家の状態を維持するために、定期的に、中庭、玄関前オープンスペースに牛糞を水で薄めたものを塗り、地面のひび割れを防いでいる。また、壁にも、定期的に土を塗って補修・装飾作業を行っている。これらもすべて女性の役割とされている。女性たちが使用する土の種類については、第IV章1で述べる。

田では、米と小麦の二毛作をしており、畑では、大根、カボチャ、ほうれん草やカラシ菜（マスタード）、オクラ、きのこ、豆類を栽培する。家畜動物として雌牛3頭と子牛1頭、そして、ヤギ3頭が飼育されている。かつては雄牛も飼っていたが、雄牛は耕作用として市場価値が高いため、盗難に遭い、その後は雌牛だけを飼うようになった。雌牛は、乳を搾るために飼育している。また敷地内に、バナナの木、スパリの木、ココナツの木、マンゴーの木、家畜動物の飼料となる植物などが植えられており、敷地の端には竹林がある。敷地内の農作物と酪農で、日常的な食事のほとんどの部分は自給自足できており、また、牛糞や竹、収穫したジュート、木材は、燃料として使っている。牛乳、田畑の収穫物、果物類は、自分たちで消費できない余剰分は、市場に売りに行って、現金収入を得ている。家畜動物の世話と農作業は家族が中心で行っているが、他には、ムサルといわれる自らの土地を持たない低カーストの男性が1人、毎日来ては農作業を手

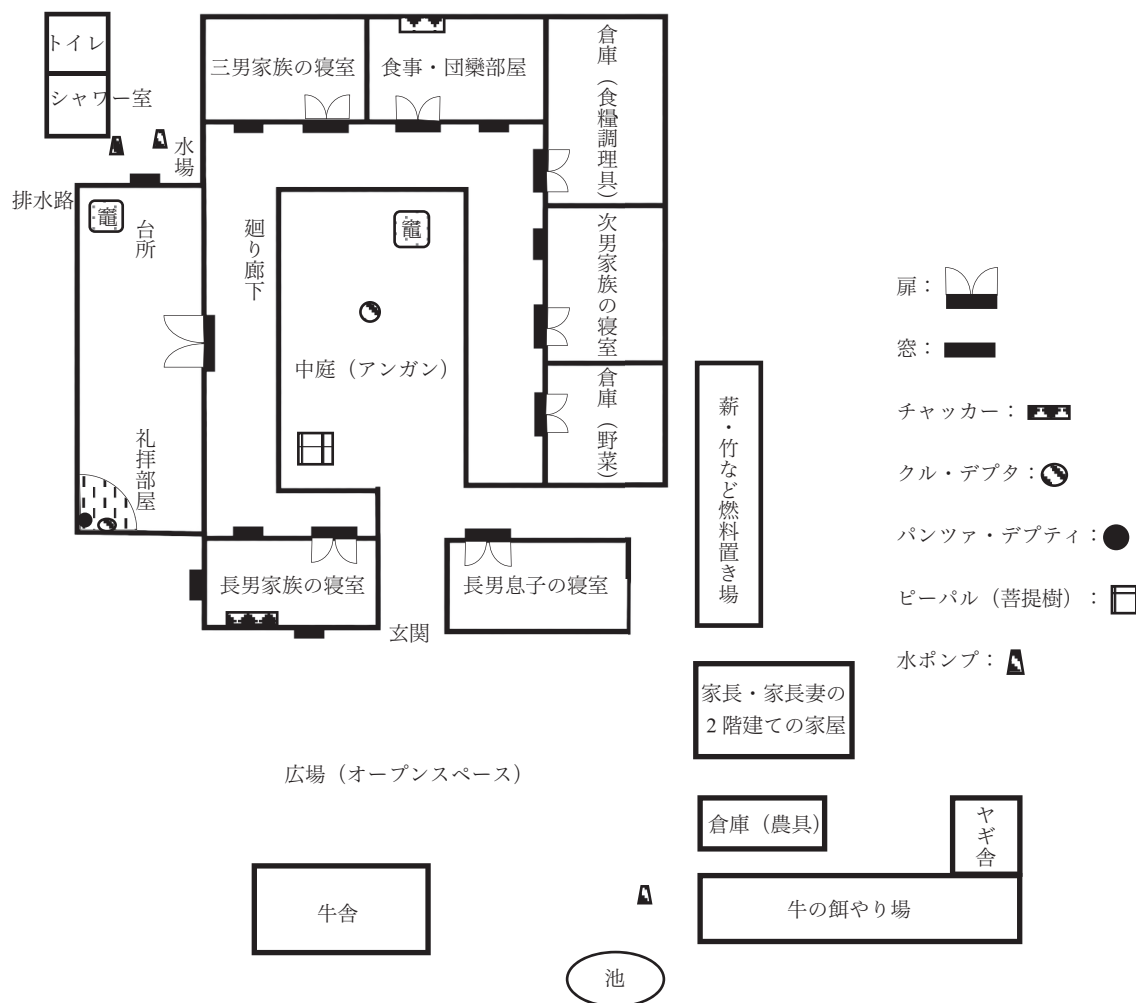
伝っている。C家の敷地から1キロほど離れた場所に広い水田があるため、他には、田植え期や収穫期、また、草むしりなどの作業は隣に住むA家の女性5人を雇っている。収穫期の最も多い時は、12人を雇うこともあるという。

2 C家の家族の1日の過ごし方（11月のとある日を事例として）（表1）

C家（図3）の女性たちの1日は、朝5時から始まる。朝起きると、顔を洗い、歯を磨き、その後、家中を箒ではいて掃除を行う。それが済むと、納屋に溜めてあった牛糞（ゴーガル）をバケツに入れて水を混ぜ、それを、家の中庭と玄関前のオープンスペースに1時間かけて丁寧に塗る。神聖な牛の糞を塗ることで、清め、地面が乾燥してひび割れするのを防ぐ。また、牛糞を塗った場所にはハエが寄ってこないため、快適で心地よい場となるのだという。牛糞を敷地の地面に塗る作業は、火曜と金曜の週2回である。

長男の妻が牛糞を中庭と玄関前のオープンスペースに塗っている間に、次男の妻は牛乳を温め、ミルクティ（チヤ）を家族の人数分用意する。ミルクティは、家長が一番先に渡すことになっている。長男の妻はミルクティを飲んだ後、昨日の夕飯の調理で使った鍋など、残った洗い物を済ませ、薪（ダウラ）や乾燥させた牛糞（ゴラー）を納屋から取ってきて、竈門の火を熾し料理を始める。まず、畑で獲れた新鮮な野菜でおかずを作り、その後、豆（ダル）スープ、最後に、主食の米を炊く。すべての調理を終えるのに3時間ほどかかった。

C家の食事は、家族が一緒に食事をするのではなく、廻り廊下へそれぞれ好きな時間にやってきて好きな場所に座ると、長男の妻が食事を準備し、給仕をするというスタイルである。朝食は9時半ごろから11時の間に全員が済ませる。その後、次男の妻が牛舎の掃除をした後、女性たちは、最後に一緒に台所で食べる。女性たちの午前中の家事は、およそ6時間かかる。



家長の妻は、早朝にミルクティを飲むと、まず、近くの茶屋に搾りたての牛乳を毎日届ける。そして、帰宅して朝食を済ませると、家の隣にある畑で、家族の食べる1日分の野菜を収穫して、自宅の台所に届ける。筆者が参与観察した日は、朝食を食べてから少し休憩すると台所で米の蒸留酒（ロキシー）を作り、12時ごろに、身支度をして畑で収穫したばかりの野菜をバザールへ売りに行き、18時ごろに帰宅する。

女性たちは、少し休んで、午後15時過ぎから、洗濯をして、沐浴する。沐浴後に、洗濯物を中庭に干す。その後は少し雑談をして過ごす、17時過ぎになると夕方の礼拝（サンザ・バッティ・プジャ）を行う（プジャの内容については後述）。

夕食は、朝のうちにほとんど準備しておくので、夜の調理はそれを温める程度になっている。19時から21時ごろが夕食の時間であるので、家族は、好きな

タイミングでやってきて、周り廊下の好きな場所に座り、それぞれ黙って食事をする。女性たちは、再び、家族全員が食べ終わると、揃って夕飯を食べ、夕食で使用した食器を洗う。それが済むと、歯を磨き、すぐに就寝する。午後の家事労働は、およそ3～4時間かかった。女性たちの家事労働時間は、一日9～10時間程度である。

続いて、家長の仕事について述べる。家長は、毎朝5時半に乳牛の乳をバケツに搾り、それを台所に持っていく。家でミルクティを飲むとその後、近所の茶屋へ行き、茶屋に集まるメンバーたちと雑談して情報交換するのが日課となっている。茶屋から帰ってくると、朝食を食べ、それから農作業をしたり、家畜動物の世話をしたりして過ごす。昼過ぎになると、年配の男性の床屋がやってきて、家長の髭剃りと散髪を行った¹¹。17時になると、牛を夜用の牛舎、ヤギを夜用の

¹¹ 家長は生まれてから今まで床屋へ行ったことはなく、床屋が毎月曜に家に来るになっている。

表1 C家の秋の日常生活（2023年11月の筆者によるフィールドワークから）

Time	長男の妻	次男の妻	家長の妻	家長
5:00	洗顔、歯磨き	洗顔、歯磨き		
5:30	家と玄関前の広場を箒で掃く			牛床で乳搾り。(～6:00)
6:00	ゴーガル（牛糞）に水を混ぜ、それを地面に蒔いていく。それを箒で全体にのばしていくことを繰り返す。（ゴーガル塗りは、週2回）(～7:00)	牛乳を沸かして、ミルクティを煎れる。		牛を日中用の牛舎へ、ヤギを日中のヤギ舎へ移動させ、飼料を与える。
6:15		ミルクティを家長、その他の家族メンバーに持っていく。	中庭の縁側でミルクティを飲む。	中庭の縁側でミルクティを飲む。
6:30		最初に、昨夜の洗い物の残りをポンプ井戸のところで洗う。薪（ダウラ）を納屋から取ってきて、料理を始める。（3つのおかず、ダルスープと炊飯）(～9:30) 子どもが学校に行くときは、8時までに食べさせるために急いで支度する。（学校の休日だったためゆっくり準備）	生の牛乳を近所のお茶屋さんに売りに行く。(～7:20)	
6:45		（次男が出勤）	野菜収穫	
7:00	ゴーガルを塗り終わると、料理を次男の妻と共に行う。3つのおかずとダルスープ、米を炊いた。			
9:30		牛乳を温め、改めて配って飲む。このときに鶏卵も食べる。		
10:00	家族に食べさせる。	家族に食事を食べさせる。		
11:00		牛舎の掃除。 まず、牛糞を集めて畑の脇にある納屋の下に保管。その後、食べ残した藁を箒で掃いて掃除。（午後の時間のあるときに、日中いる牛舎の掃除）	ロキシー（酒）を作り始める。	
12:00			バザールに野菜を売りに行く。(～18:00)	
14:00	朝食	朝食（長男の妻と一緒に台所のある部屋で）		
15:00 ～ 15:30	日中生活する牛舎の掃除。（朝の要領で）			
15:30 ～ 17:00	沐浴と洗濯	午後は、沐浴し、洗濯。		17:00ヤギをヤギ舎、牛を牛舎にしまう。（牛舎にもエサを入れておく）
17:30		サンザ・バッティ・プジャ（台所からスタートして、チラカと線香を持って、家の部屋全て納戸の扉を少し開けて灯火を照らし、閉める。牛舎にも行う。家庭によっては、主要な部屋にはお香を置く家もある。		
19:00 ～ 21:00	夕食	夕食	夕食	夕食
21:00 ～ 22:00	就寝	ある程度は洗い、残った洗い物は次の日に回す。 就寝	就寝	就寝



写真1 礼拝部屋

ヤギ舎へ入れる。

長男の息子は、普段、街のオフィスで仕事をしており、特に家の中で割り振られた仕事はないが、家長に頼まれると、トラクターで田を耕したり、田畑の手伝いをしたりしている。

次男の長女は学校の休みの時には、料理を手伝ったり、洗い物をしたりして家事を手伝っている。長男、次男の妻たちが忙しい時は、夕方の礼拝を代わりに行うこともある。

小括

以上、C家の日常生活をみてきたように、家族は、家畜動物の恵み、そして、田畑で育てた自家製の野菜や米などの作物によって命を繋いでいる。家族は毎朝、牛から搾ったミルクで栄養補給をし、余剰のミルクは販売することで利益（現金収入）を生み出す。そして、牛糞は、家のメンテナンスに利用できるだけでなく、調理をする際の燃料にもなり、田畑の肥料としても利用している。野菜や米などは、市場で買ってくる必要はほとんどない。唐辛子などの香辛料も畑で育てている。鶏肉などの精肉や魚は買う必要があるものの、普段は、肉はあまり食べず、自家製野菜を中心とした自給自足に近い食生活を送っている。人々の農耕への感謝の気持ちというのは、年1回家庭で行われるティ



写真2 中庭（アングアン）

ハール祭によく表れている（次節の(3)を参照）。

3 C家における儀礼祭祀

(1) 夕方の神々への礼拝(サンザ・バットィ・プジャ)

日常的に行う儀礼として、日が沈む頃に行うサンザ・バットィ・プジャがあり、基本的に女性たちが行う。台所から始まり、台所横にある礼拝部屋（写真1）に鎮座する祖先神（クル・デプタ）とヒンドゥー五女神（パンツァ・デプティ）にそれぞれお香と灯火（チラカ）を供え、その後、各部屋の扉を開けて部屋にお香を焚き、灯火（チラカ）の光を、部屋に向けて手で仰ぎ送り、お香を供える。その後、中庭（写真2）（アングアン）¹²の中央付近の地面に宿っている祖先神にお香を、そして最後に、中庭の東側に植えてある菩提樹（ピーパル）の木にお香と灯火で礼拝を行い、家の繁栄を願う。特に、毎週月曜は、シヴァの曜日とされており、寝室に安置してあるシヴァ神の額入りの絵にもお香と灯火を供える。

(2) 女神ラクシュミーを迎え入れる：ティハール祭の「ラクシュミー・プジャ」

ティハール祭（スクラート）とは、毎年10～11月頃に5日間、女神ラクシュミーを迎え、カラス、犬、牛、そして兄弟姉妹の絆に感謝と祈りを捧げる各家庭で行

12 チョウダリによると、「中庭（アングアン）は、タルー民族の集落において重要な空間である。そこには社会的、文化的、そして宗教的な意義がある。タルー民族のあらゆる活動は中庭を中心に展開される。中庭は、社会的文化的行事のための集いの場として機能している。中庭は空気の流れを可能にする各住居に空気が流れ込むようにしている。それは夏の間、家族が休息する場所として機能する。すべての祝宴や行事は中庭で行われるため、文化的意義も持っている。また、子供や若者にとってのレクリエーションの場としても機能する。中庭は、農産物の貯蔵や作物の乾燥のためのスペースを提供するため、農耕目的とより深く関連している。また、洗濯、入浴、衣類の天日干しにも利用される」（Chaudhary 2022: 39）

われるヒンドゥー祭祀である。ティハール祭での女性の役割の詳細については別稿で論じた（竹内 2026）ため、本稿では、簡単に述べる。モランギヤ・タルーのティハール祭では、絵や模様を描き、光を灯して家を美しく装飾することは非常に重要とされている。豊穡、幸運、富を司る女神ラクシュミーは、美しく清潔な場所を好み、絢爛豪華なものを愛する神として知られている。家にラクシュミーを迎え入れるために、ティハール祭の準備は祭の約1週間前から始まるが、その準備はすべて女性たちの役割である。女性たちは、まず、家屋の壁に成形されている草や花をかたどった立体模様モカの色づけから取りかかる。1年前のティハールの後、色がかすれて薄くなったり、ひび割れていたモカの模様を、まるで新築のように甦らせるのである。まず、モカに赤、黄、青、緑、白で色づけをして、家屋の壁面と地面との間には、白い土を布に付けて、縁取るように白いラインを描き、家を装飾する。そして、ラクシュミー・プジャ当日には、玄関前に立てられたバナナの木の前根元に赤と白で色づけをして美しく装飾する。そして、夜には、電飾とたくさんの灯火（チラカ）で家を明るくし、女神ラクシュミーを招き入れ、ごちそうを供える。

さらに、ラクシュミー・プジャの次の日には、米粉を水で溶いたもので各扉の前に指を使って様々な模様の白いラインを描き、結界を作る。そして、女神ラクシュミーが部屋に長く留まるようにと願う。人々にとって、ラクシュミーがいかに憧れであり、大切な女神であるかを、ティハール祭での丁寧なもてなし方が示している。

(3) 農耕への感謝：ティハール祭最終日のハルツマナ（装飾儀礼）、パケウォー・プジャとゴバルダン・プジャ

ティハール祭最終日には、農耕に関わる牛や農具などに感謝をする儀礼を行う。まず、台所、礼拝部屋、そして、農耕に関わるものに、5本の赤い縦ライン（シンドル）を描き、米粉でできた白いティカで、それらを丸く囲うように描くハルツマナという儀礼を女性たちが行う。台所の竈・鍋、礼拝部屋（写真1）の祖先神（クル・デプタ）とヒンドゥー五女神、そして、農具、家畜小屋にいる牛とヤギの身体、玄関前の地面、

米倉庫、最後に、牛舎の餌入れ箱という順にこの印を描き、美しく装飾するのである。ハルツマナ儀礼の後には、パケウォー・プジャが行われる。パケウォー・プジャとは、玄関前に立て掛けられている農具の前に、上半身裸の子どもたちが一列に座り、年長者から米粉の白いティカを上半身に塗られる（服を着たという意味になる）。その後、子どもたちによって、牛に捧げる様々な種類の植物を棒でたたいて繊維を潰され、その柔らかくなった植物と稲穂を混ぜて牛に食べさせる一連の儀礼である。普段は与えない稲穂と栄養価の高い草を牛に与え、その後、牛にベルをつけ、体をスタンプで美しく装飾し、牛に普段の感謝をするのである。そして、最後に、ゴバルダン・プジャを行うが、モランギヤ・タルーの人々は、他の地域とは異なり、農耕を阻害するワニを牛糞でかたどり、それを退治するという儀礼を象徴的に行う。女性が牛糞でワニと入れ物（バカリ）を1対ずつ作り、夫と二人でワニに礼拝後、そのワニを棒で叩いて退治してしまう。この儀礼で、ワニのいない安定した農耕生活を祈念するのである（竹内 2026: 53-56）。

以上のように、この日、牛は体を清められ、額に祝福の印として赤いティカをつけられて好物の餌を与えられ、慰労される。農具に対しても、ティハールの間、玄関前で美しく装飾され、休まされる。タルー民族は自然すべてを崇拝するといわれるが、中でも、農耕への畏敬の念が強いことがこの祭の祝い方によく表れている。

IV 家における土を使った女性たちの信仰生活

1 C家の家屋に使用される4種類の土（マティ）

前述の通り、C家の家屋の壁は、土でできており、雨風による劣化のため、定期的なメンテナンスが欠かせない。メンテナンスは基本的に女性たちが担っている。そのため、女性たちによって袋に詰めた土が常に家に保管されている。

家に使用する土には4種類あり、場所によって塗分けられている。

まず、一つ目は、ラッタア・マティ¹³と呼ばれる土で、特徴として、最も粘り気があって耐久性が高いた

13 ラッタアとは、粘り気のあるという意味である。ラッタア・マティの色としては、黒色が多い（赤っぽいものもある）。

め、家の壁全体に使用されている。この土は、家の近隣の川や池の底の土、また、田でも採取できる粘土質の土で、自分たちで採取してくるものである。土の色は、黒色（赤色のものもある）で、綺麗な色ではないが、粘り気が強いので、家の内部を中心に、家全体に使えるのだという。家には補修用にいつも保管されている。台所は、年に3、4回ほどラッタア・マティを全体に塗ってひび割れなどを補修している。「チャッカー」と呼ばれる家の中の飾り棚も、ラッタア・マティで作るのだという。

続いて、ウズロー・マティと呼ばれる土（ウズローとは、白いという意味である）は、装飾用、儀礼用で使用され、清める役割も果たすという。家の外壁は、ウズロー・マティが好まれる。毎年、ティハール祭の始まるまでに、外壁全体にウズロー・マティを塗り、外壁を美しく化粧をする。外壁にあるモカには、まず、全体にこの白い土を塗り、さらにその上から、多色の化学塗料を筆を使って色づけをしてモカの柄を美しく浮かび上がらせる。また、ウズロー・マティは、清める役割も果たすことから、礼拝部屋の祖先神、ヒンドゥー五女神に塗られる。そして、中庭（アングン）の地面中央部の祖先神が宿っているとされる場所にも、ウズロー・マティが円形に塗られ、清められる。

ウズロー・マティは近くの川では採取できないため、市場で購入しなければならない。C家では、土製の容器を生産・販売している店で購入するのだという。購入する店によって土の色合いには多少のばらつきがあるが、ウズロー・マティは白が鮮やかであればあるほど貴重とされ、人々に好まれる。しかし、そうした明るい色のものはなかなか手に入らないため、暗めの土に明るい色の土を混ぜ合わせて使うこともあるという。1キロあたり、約40ルピーである。

その他には、ラール・マティ（ラールとは、黄色いという意味である）、ギオール・マティ（ギオールとは赤いという意味である）がある。これらも外壁装飾のために利用される。家族の好みで、赤色が好きであれば、ギオール・マティ、黄色が好きであれば、ラー

ル・マティを使用する。ラール・マティやギオール・マティも土器屋で購入する。これらも1キロあたり約40ルピーである。

2 C家に見られる家屋装飾モカ

インフォーマントのC家のモカは、家の部屋すべて（寝室、台所、納戸など）の出入り口（扉）と各部屋にある窓を囲うように成形されている。写真3は、インフォーマントの家の玄関に入って、奥の正面に見える、食事・団欒の部屋の扉に施されたモカ（図4）である。

モカは、上部の花や幾何学模様からなる立体装飾部分（mokha）と床についた下部のシンプルなデザイン（「支え」）の立体装飾（mokhaa）（図では、Uの字に似ている）の二つの部分から構成されている。より重要なのは、この下部の「支え」になる部分であるという。前述した通り、下部のモカ（mokhaa）の「支え」がないと、家族の生活基盤（貯蔵米）を守ることができないと信じられている。インフォーマントの家では、下部のモカ（mokhaa）はすべてU字の形をしていたが、家によっては、下部のモカ（mokhaa）が寺院の形をしていたり、植木鉢などの形をしていることもある。下部のモカ（mokhaa）は、起伏のない平面で、装飾は少なく作られており、カラフルな塗料は塗らず、赤や黄などの色土の一色で仕上げられている。

一方、上部のモカ（mokha）には、華やかな色¹⁴がつけられており、繊細な美しいラインの幾何学模様や花模様が特徴的である。この模様特に決まりはなく、モカを成形する女性のセンスで自由に描いて良いのだという。美しいツルバナ模様や幾何学模様を成形したり、家の繁栄を願って、縁起の良いとされる鳥の模様を施したり、模様にヒンドゥー女神ラクシュミーを歓迎する言葉を入れたりする。上部のモカ（mokha）には、家を美しく装飾するというだけではなく、女神ラクシュミーを迎え入れるという意味を持つ。それについては、IV章3節で論じた。

C家に見られる様々なモカの装飾柄には、鳥と花が

14 土の色については、マイティ（2004: 84）に次の記述がある。「壁の塗装には従来、ネパール産の黄色い粘土（ハーダー／ビリ・ミッティ）、黄土（ゲル）、池の粘土（セタ・ミッティ／パローヒトカ・ミッティ）などの天然色のみが用いられていた。今日では様々な化学塗料が市場で容易に入手可能であり、この目的にも使用できる。一般的に使用される色は、黄色（ビリミッティを使用するか、市場で購入）、青、ピンク、緑（すべて市場で購入）、白（ムリア、すなわち市場で購入するチョーク塊）、オレンジがかった赤（市場で購入する黄土から得られる）、そして黒（この色は焼いたモーターオイルから得られる）。「自然界に見られるような色彩使用に関する厳格な規則は存在しない。したがって、花を緑に、葉を赤く描く例も頻繁に見られる。したがって色の選択は作者の気まぐれと個人的な好み依存する」（Maiti 2004: 85）



写真3 モカ

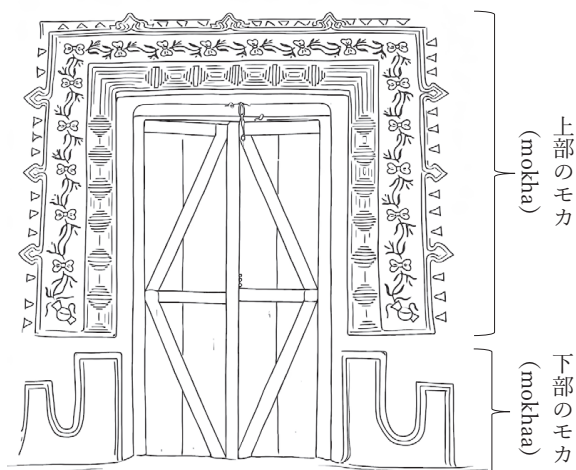


図4 食事・団欒部屋の扉にあるモカ

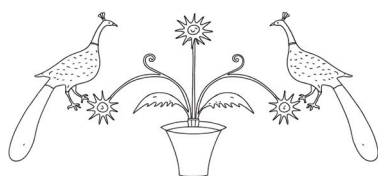


図5 玄関のモカ（クジャクと鉢に植えられた花の柄）

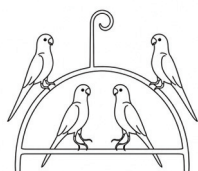


図6 礼拝部屋前のモカ（オウム柄）



図7 窓枠の周りのモカ（welcome）

多く描かれている。「玄関」の上部には花の植木鉢を挟んで左右対称に孔雀が描かれている(図5)。そして、礼拝部屋の外壁には、止り木に掴まった4羽のオウムが描かれている(図6)。オウム、孔雀¹⁵がタルー社会では縁起の良い鳥であると考えられている。

また、各部屋の扉の周りには、幾何学模様が施され、鉢植えから花が生えており、伸びたツル状の花が扉を囲んでいるようなデザインが多い。その他には、「welcome」という文字がデザインとして描かれている家も多く(図7)、柄は、外部からの影響を受けて時

代変化をしていることがわかる。“welcome”とは、女神ラクシュミーを歓迎しているのだという。

モカ作りが得意だというインフォーマントの女性は、「モカは、土を手で少しずつ壁に盛って成形します。モカ成形時に途中でデザインがうまくいかないと思ったら、何度でも崩して剥がして、また一からやり直します。モカのデザインは、自分の母親から教えてもらったデザインを受け継いでおり、自分のセンスでアレンジしています。決まりはありません」と話した。

日々、強い日差しや雨風に晒されると家屋の土壁は

15 南アジアの神話では重要とされる孔雀は他のどの鳥よりも多くの家でモチーフとして装飾されている。サンスクリット文学は、それを人間の幸福、情熱、至福と関連付けている。ラーマとシータは孔雀の仲間に喜び、シータがラーマに見捨てられた時、孔雀は踊るのをやめたと言われている。多くのタルー民族は、家を出る時に孔雀を見つけたら、その日は幸運に恵まれると信じている。(https://www.asianart.com/articles/tharu/ 2026.1.17時点)

徐々にひび割れて、傷んでくる。モカもヒビが入ったり、色落ちをする。女性たちは年に1回、ティハール祭が始まるまでに土を塗り、家をきれいな状態に仕上げる。何日前からという決まりはないが、大きな家に住んでいれば、1ヶ月前から家の土壁に土を塗り始める人もいる。インフォーマントのC家では、ティハール祭の15日前から、女性たち全員で家の外壁に土を塗り始める。まず、ウズロー・マティという白い土を水で溶き、布に含ませて手作業で全体に塗る。モカの幾何学模様や花や鳥など模様の部分には、土が乾いた後、市場で購入した、赤、青、黄色、緑、白などの色の化学塗料を筆で彩色し、模様を鮮やかに甦らせるのである。

3 モランギヤ・タルー女性が土によって神と関わる

モランギヤ・タルーの女性は、儀礼の時に土の種類を使い分けて使用したり、また、色砂を使って絵を描く。儀礼では白が際立ち美しいとされるウズロー・マティという土を使用して儀礼の場を清める。例えば、ティハール祭のラクシュミー・プジャの日には、女性は玄関に土（ウズロー・マティ）と色砂を使って美しい花の曼荼羅を描く。これらの描く技法は伝統的に母親から娘に教え伝えられていくものである。家屋装飾モカの模様の描き方も、幼い頃から母親や祖母の描く姿を見て、一緒に作業することで体得していく¹⁶。

ティハール祭の間、玄関前に立てられる1対のパナナの木（ザガー）の根元に土を盛り、そこにアヒルの砂絵を描く作業があるが、C家においては、次男の娘が15歳から作業すべてを任されており、30分ほどかけて美しく描いた。隣で母親に見守られながら、儀礼役割を身につけ、自立していく姿が印象的であった。

モランギヤ・タルーの儀礼は土とのつながりが強くみられる。女性たちが土を使ってモカを成形したり、定期的に修復することは、家と神々（土）を強く結びつけ、家を平穏に保たせる意味があるのである。

V 分析：土を介した多様な存在の連環

1 家における「土」を介したつながり：家族、神々、家畜動物、作物

これまで、家という場で、女性が日常的に土を介した儀礼を実践したり、モカを成形したりすることで、神々（大地）に平穏な暮らしを保つように働きかけていることを述べてきた。

本章では、神々（祖先神とヒンドゥー五女神）、家畜動物（牛、ヤギ）、作物（米）がどのように相互作用して結びついているのか、その関係性について「土」に注目して分析する¹⁷。

(1) 神々（祖先神、ヒンドゥー五女神）

神々（祖先神、ヒンドゥー五女神）は、家の礼拝部屋と中庭（アンガン）に祀られている。神々とは土そのものであり、偶像の姿はしていない。神々は、日々女性たちによってきれいに保たれており、家族を守護している。神々である土は、礼拝部屋に祀られているだけでなく、中庭（アンガン）中央の地下にも祖先神が宿っていると考えられている。神々は、女性たちによって清浄を保たれ礼拝されることにより、家と家族、また、家畜動物や作物を守護し、繁栄をもたらす。家と神々というのは、土（大地）を介して分離することはできず、一体となっている。したがって、家族は家を見放して出ていくことはできない。神々と家が一体として存在しているということは、家と家族との紐帯を一層強固にしている。

(2) 家畜動物（特に、牛）

ヒンドゥー教徒であるタルーの人々の生活にとって、家畜動物は重要であるが、牛は特に神聖な動物である。家で飼われている牛の糞（ゴーガル）は、非常に重要で、家を清め、中庭の地面のひび割れを補修し、ハエが来るのを防ぐ役割も果たしている。牛糞は、水と土と混ぜられ、家の手入れに使われる。調理する際の燃料としても役立つ。牛糞を平たく丸めて木材に貼り付け、それを数日間乾燥させたもの（ゴラー）は、

¹⁶ 近年、モカの成形されている家が減少しているため、モランギヤ・タルーの人々が、モランギヤ・タルーの文化継承のためにと、若い世代にモカ作りのワークショップなども行っており、モカ文化を次世代に継承しようという動きも出てきている。また、YouTubeでモカについて発信する人々もいる。近年、モカの模様からインスピレーションを得て、モカを採用した画家も出てきているという。モカが形を変えて、モランギヤ・タルーの民族アイデンティティとして継承されていくのかもしれない。

¹⁷ ここでは、プリュノ・ラトゥール（ラトゥール 2019）のANT（アクターネットワーク論）における人間と非人間を同じ資格で扱うとする考え方を参照し、神々、家畜動物、作物がどのように相互作用しているのか、分析を行う。

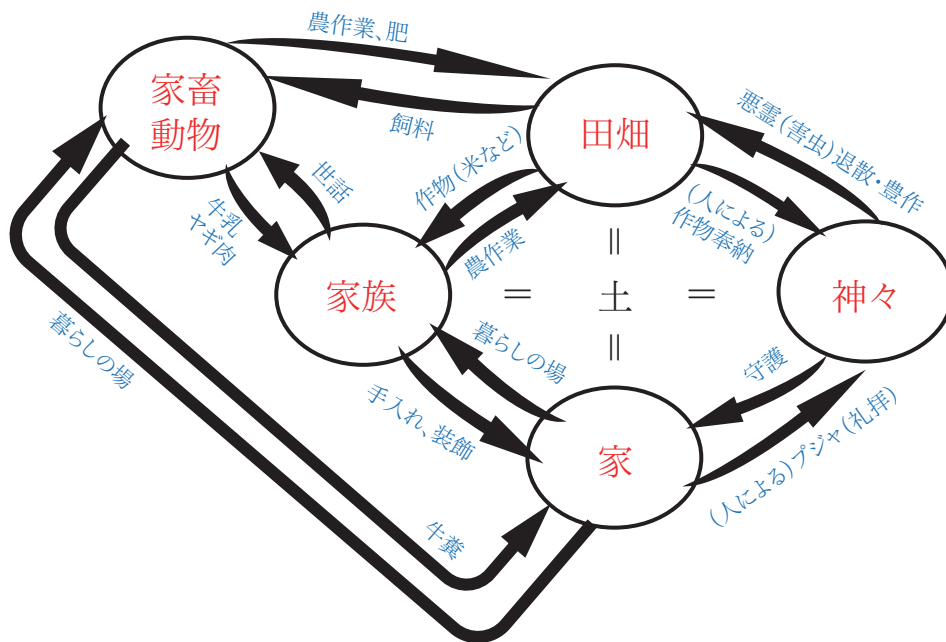


図8 「土」を介したつながり

台所で調理する際の貴重な燃料として使える。土は、牛の糞とも一体化して、家の連環の一部となっている。

(3) 作物（とくに米）

タルー民族は、農作物の中でも米を最も重要な作物と考えている。前述したように、家に女性がモカを施すことによって、家は、家に備蓄されている作物（米）が減っていくことを守ることができると思われる。昔から、米蔵の数は、家の格を表し、米は家の豊かさを表現するものであった。人々は、土で作るモカによって、女神ラクシュミーを迎え入れ、作物の豊穡と家族の繁栄・幸福を願い、女神はそれを実現してくれる存在である。

米は、モランギヤ・タルーの家族の主食であり、神々に捧げる重要な供物でもある。モランギヤ・タルーの人々は、米から多様な食文化を生み出している。例えば、米粉を水で練って長い棒状の団子にして蒸して食べるバギヤという特別な料理がある。バギヤは、儀礼祭祀の時に食べられる。その他に、特に、ネパール東部平原に住むタルー民族の伝統的な特別料理として、米粉を水でこねたものをお椀に詰めて成形し、それを布で包んで蒸して調理するバックという料理もある。土から生まれた作物（米）とは、人が生きる上で欠くことのできない、神（大地）からの最高の恵みである。

2 タルー民族の大地信仰：「土」を介したつながり

チョウダリによると、「タルー民族にとって、大地は、人間、精霊、そして非人格的な力が複雑に絡み合う広大な聖なる舞台であり、これが個人が人生を歩む方法に影響を与えている」(Chaudhary 2022: 59-60) という。

チョウダリがいう「大地」を、ここでは「土」に読み替え、モランギヤ・タルーの家という場における、家族、神々、家畜動物、作物の関係性について、考察したい（図8）。家族は、土がなければ、作物を得ることもできず、家族も家畜動物も生きていくことはできない。また、土がなければ家を建てることもできない。事例からもわかるように、モランギヤ・タルー社会では、神々と土はそもそも一体と考えられている。「タルー民族は、『土の息子』と呼ばれてきた」(Pokharel 2025) というが、歴史的に、居住してきた環境の中で、土から様々な工芸品も生み出してきた。モランギヤ・タルーの人々は、土の特性を活かした独自の文化を築いており、まさに土と共生し、それに依存する関係にあるといえる。本事例のインフォーマントのC家でも女性たちは土の種類による色や粘性などの特徴の知識も豊富に持っていて、日常においても非日常においても、土を利用している。

土は何にでもなれる可塑性があり、すべてを包み込む。土は、モランギヤ・タルーの人々にとって、「壊れたものを美しく補修するもの」、「良いもの」、「清めるもの」、「生活に欠かせないもの」、「生活用品の様々

なものを形作っているもの」として解釈されている。だからこそ、神々も人間も家畜動物も作物も工芸品も、すべては土でつながっており、「万物は土(神々の世界)から生まれ、土に還る」というタルー社会の大地を中心とした世界観の一部として、みることができるかもしれない。

モランギヤ・タルーの世界観の中では、女性たちが土を使ってモカを成形し、それを継続的にメンテナンスすることによって、家の中では、人間も非人間も共存共栄ができていのである。モカは、家と一体となっている神々にとってなくてはならないものであり、それが毎年美しく色をつけられて生まれ変わることで、神々は家族、家畜動物、作物を守護し、家族の生活を支えているのである。

VI 結びにかえて：モカの意味と家の変容

女性たちは、家族の安定・繁栄のシンボルであるモカを施された家は、家族、神々、家畜動物、作物が共存共栄できると信じてきた。モランギヤ・タルーの家では、家族と共に、それらの多様な存在が相互作用し、家という場が維持されてきた。女性にとって、家は、日常的には、家事・育児の場であり、家畜動物の世話や農作業の場である。家に作物(特に米)が蓄えられ、稲藁が家畜動物の餌となり、家畜動物の糞が作物の肥料となり(牛の糞は神聖なものでもあり)、良い土が作られ、また作物が育つ。また、非日常的には、家は神々が訪れる場であり、神々は邪悪なものから家を守る。家は、家族、家畜動物、モノ(農具、現在はトラクターなども含む)を保護する場である。そして、ティハール祭(スクラール)期間中に、女神ラクシュミーを迎え入れる場でもある。

モカを成形することは、女性という主体が作業を担うことによって構築され、維持される一連の相互作用と循環である。単に家を飾る行為ではなく、家という場において、道具、家畜動物、作物、目に見えない存在(神や霊)が互いに影響を及ぼし合い、一つの安定したネットワーク(世界)を構築・維持しようとするプロセスとして捉えられる。家事や育児の中心に位置

する女性にとって、家(物理的な空間)を良好な状態に保つことは、自身の生存やアイデンティティに直結する。したがって、家に汚れやひび割れが生じた時、女性は、それを家側からの修復要請であると解釈し、土で補修・模様で覆うことで、平常・平穏を取り戻す。女性は家壁装飾モカを描くことで、家内安全と豊作を祈念し、家という空間を主体的に管理しようとする。時間とともにモカの模様は日常に埋もれ、模様の意味などは意識されなくなるが、モカがあることで、家は単なる建物ではなく、住む人の安寧を保つ。祭の機会に、モカが更新され、家の安寧と繁栄の願いが再確認される。

しかし、近代化の進行のなかで、家自体の形態・素材が大きく変化しつつある。チョウダリは、タルーの家の建材の変遷について次のように述べている。「タルー民族の住居の外壁は、古くは、カリヤ・ガス(現地語で「カルヒ」と呼ばれるサトウキビに似た植物素材)、ニガロ竹、土に加え、牛糞や籾殻を混ぜ合わせて作られた。カリヤ・ガスの不足により、地元の人々はニガロ竹と竹の葉を泥と組み合わせ、建物を建てるようになった。この構造において、竹は主要な耐力材として機能していた。その後、人々は壁に泥を塗った竹の細片を使用するようになった。驚くべきことに、近年の多くのタルー民族の家屋では、泥と竹の壁のメンテナンス頻度を減らすため、これらの竹の細片にセメントを塗るようになった。家屋はさらに進化を続け、日干しレンガと泥モルタル、そして泥の漆喰が用いられるようになったが、最終的には焼成レンガと泥、さらに後にはセメントと赤レンガに取って代わられた。現在では、住居の大部分の外壁がレンガとセメントで造られている。同様に、古いタルー民族の家屋には壁の装飾も見られるが、近年の世代の関心の低下により、こうした伝統は失われつつある」(Chaudhary 2022: 48)

近年、モランギヤ・タルーの人々の土壁の家は、徐々にコンクリート造の家に建て替えられている。鉄筋コンクリート造の家は、土の家とは異なり、隙間風の入らない密閉した部屋を作り出すことができ、冷暖房によって温度管理もできる。なにより、定期的に土で家の補修をする必要もなく、管理が楽になる¹⁸。また、

¹⁸ 調査中に、C家の家族と筆者が食事をしていた際、「日本人は食べる量が少なくても大丈夫なのね。羨ましい。私たちは、家の掃除、料理、洗濯、家畜動物の世話、農作業、何もかもを人力でやらなくてはいけないから、毎日、ものすごくエネルギーが必要です。だから、たくさん食べないと倒れてしまう。それで、太ってしまうの。日本では肉体労働ではなくて、頭脳労働が中心なんですよ。今の生活も好きだけど、近代的な便利な生活ができるならしたい」と話した。

洪水などの自然災害にも強いということで、経済的な余裕があれば、鉄筋コンクリート造の家に建て替えたいと考える人々が多い¹⁹。洪水で家が流された経験のある人は、安全なコンクリート造の家に建て替えたいとより強く考えている。

また、伝統的な建材が入手できなくなってきたことも現代的な建物が増えている理由の一つであるという。チョウダリによると、「伝統的な泥瓦やその他の物品を生産する工場が閉鎖されたこと、また、木製瓦、カリヤ草、沖積泥池の不足も、人々がレンガ造りの家屋に切り替えるもう一つの理由」(Chaudhary 2022: 6)である。

人の暮らしを近代化(土から離れた生活をする)ことというのは、モランギヤ・タルー社会の家を場とした家族、神々、作物、家畜動物の相互作用が大きく変化することを意味する。家がコンクリート造に変わると、モカの文化が消滅し、家屋に対する女性の役割も失われることになる。コンクリート造の壁では、土を塗ってもすぐに剥がれてしまい、モカの成形は難しい。また、密閉された部屋の構造では、内と外の区別が明確になり、大地との連続性は失われる。中庭(アングン)もコンクリートで埋められると、神々との土を介したつながりは礼拝部屋のみとなる。家がコンクリート造になると、一つの生命体のように相互作用しあっていたタルー民族の家に宿る様々な存在の土を介した連環が途絶えてしまう。

このような状況の中で、モカは消滅に向かうのだろうか。人によっては、コンクリート造の家を建てても、ペンキでモカのモチーフである幾何学模様やオウム、孔雀などの鳥、植木鉢から出てくる花のツタ、寺院などの模様を描くケースもあるという。近代化の進行とともにモカは消滅に向かうのだろうか。その代替が考案され、生き延びるのだろうか。また、モカの変容とともに、モランギヤ・タルーの文化と社会は、全体としてどのように変容していくのだろうか。今後も注目していきたい。

謝辞

本調査は、日本学術振興会科学研究費(22K13269)により可能となりました。

本稿の執筆にあたって、有益なご助言をくださった2名

の査読者に感謝申し上げます。また、本研究の調査に協力してくださったインフォーマントの家族にも深く御礼申し上げます。

参考文献

(日本語文献)

竹内 愛

2023 『ジェンダーと災害の民族誌—変容する農民カーストとネパール社会—』 風響社。

2026 「ネパール南部低地の先住民族タルーのティハール—農耕を支えるモノ・動物・人・神への感謝祭—」『Autres』14: 41-62。

ラトゥール、ブリュノ

2019 『社会的なものを組み直す アクターネットワーク理論入門』伊藤嘉高(訳) 法政大学出版局。(Latour, Bruno 2005 *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory*. New York: Oxford University Press.)

(英語文献)

Chaudhary, Niru

2022 *Transformation over time in Kochila/Saptariya Tharu Architecture: A case of Baswalpur village, Saptari, Nepal*. Tribhuvan University Institute of Engineering (Department of Architecture).

Gautam, Dr. Rajesh and Thapa-Magar, Asoke K.

1994 *Tribal Ethnography of Nepal*. Delhi: Book Faith India.

Guneratne, Arjun

2002 *Many Tongues, One People: The Making of Tharu Identity in Nepal*. Ithaca and London: Cornell University Press.

Maiti, Sameera

2004 *The Tharu their Arts and Crafts*. New Delhi: Northern Book Centre.

Meyer, Kurt W. and Deuel, Pamela

1997 The Tharu of the Tarai. (<https://www.asianart.com/tharu/> 2026.1.20時点)

Pokharel, Churamani

2025 The Indigenous Tharu of Nepal: History, Heritage, and Cultural Continuity. *Lumbini Journal* 2025 : 1-10. (https://www.researchgate.net/publication/397561129_The_Indigenous_Tharu_of_Nepal_History_Heritage_and_Cultural_Continuity 2026.1.20時点)

Skar, Harald O.

1999 *Nepal: Tharu and Tarai Neighbours*. Kathmandu: Mandala Book Point.

¹⁹ インフォーマントの女性に聞き取りしたところ、「モカの家は私たちの民族的アイデンティティであり、大切に守りたいと思っています。しかし、毎年、家を土で補修しなくてはならないことがとても大変です。ティハール祭の前には、2週間もかけてモカに色づけをしなくてははいけません。本当に大変です。できれば、近代的なコンクリート造りの家を建てたいです」という本音もあった。